

奄美諸島の厨子
～奄美諸島における厨子の受容と展開～

宮城弘樹

「奄美大島調査報告書 一地域研究シリーズNo.48」抜刷
沖縄国際大学南島文化研究所

2024年2月

奄美諸島の厨子

～奄美諸島における厨子の受容と展開～

宮 城 弘 樹

はじめに

琉球列島の葬墓制は、奄美諸島が薩摩藩に割譲されてもなお、洗骨再葬の文化が続いた。このため、奄美諸島では近世に至ってもなお蔵骨器が利用されたことが知られている。

近年、筆者も参加する関根達人（弘前大学）を代表とする奄美諸島の古墓調査によって、具体的な蔵骨器^{註1}や供膳具の様子が明らかになりつつある。また自身でも近世琉球の葬墓制文化について継続的調査を進めており^{註2}、ここ数年南島文化研究所の調査では奄美大島の博物館収蔵の厨子について調査してきた。

そこで、本論では奄美諸島でどのような厨子がみられるのか、その実態について俯瞰的に紹介することを第1の目的とする。次に、上記調査の中で、いわゆる壺屋で生産された琉球陶器の厨子甕とはやや雰囲気異なる厨子甕があることに気が付いた。便宜上これを産地不詳の厨子甕と呼称するが、本論ではこの厨子甕について考察することを第2の目的とした。

1. 奄美諸島の古墓調査と課題

奄美の古墓調査は民俗学的調査が先行し（小野 1968 ほか）、幾つかの文化財調査（伊仙町 2010 ほか）が実施されている。状況としては沖縄と同様の研究段階となる。但し「その件数は限られ、奄美群島の古墓は正確な測量図面が少ない上、造営年代が曖昧にされてきたため、奄美史で古墓が取り上げられることはこれまでほとんどなかった（関根 2022:457）」と指摘されているように葬墓制史については課題も多い。沖縄では、厨子の型式学的研究が進展し、年代観については幾分整理が進んでいる。奄美諸島の厨子について、その年代観を確認することは、奄美の古墓の年代を考える上でも参考になると考える。

2. 奄美諸島の厨子（図1）

(1)喜界島（図2-1～6） 喜界町歴史民俗資料室には町指定民俗文化財の厨子甕1基が展示されている。高さ120cmの巨大厨子甕で、胴中央に沈線による蓮華文が描かれ、肩部には縄状突帯が3条巡り、頸部には牡丹唐草文が描かれ、正面には唐破風形の屋門貼り付け文が付されている〔1〕（以下亀カッコは図番号を示す）。型的には安里編年（安里ほか 1997）IV-V式に並行すると目される。このようなサイズの大きな厨子は国頭村義本王の墓に類例がある（国頭村教育委員会 2019）。義本王は舜天王統第3代と伝わる人物で、

在位は1249～59年とされる。この人物の墓を、明治初年に尚家が建立したとされており、厨子も王国末期から近代初期で、本資料も明治期ではないかと目される。

喜界島の古墓調査のデータは近年調査報告が刊行され（関根 2023）、奄美諸島では最もデータが揃っている。これによって、厨子の分析が進んでいる。蔵骨器は石厨子及び中国・タイ・唐津・薩摩苗代川・琉球陶器の壺・甕が転用蔵骨器として利用された。これに厨子が確認されている。調査された37基の古墓の厨子は、御殿形を含まず全て甕形である。調査された総数は1,321基（石厨子514、甕形蔵骨器807）で、このうち11基が厨子である。その数は決して多くは無いが、少なからず流通する点で興味深い。

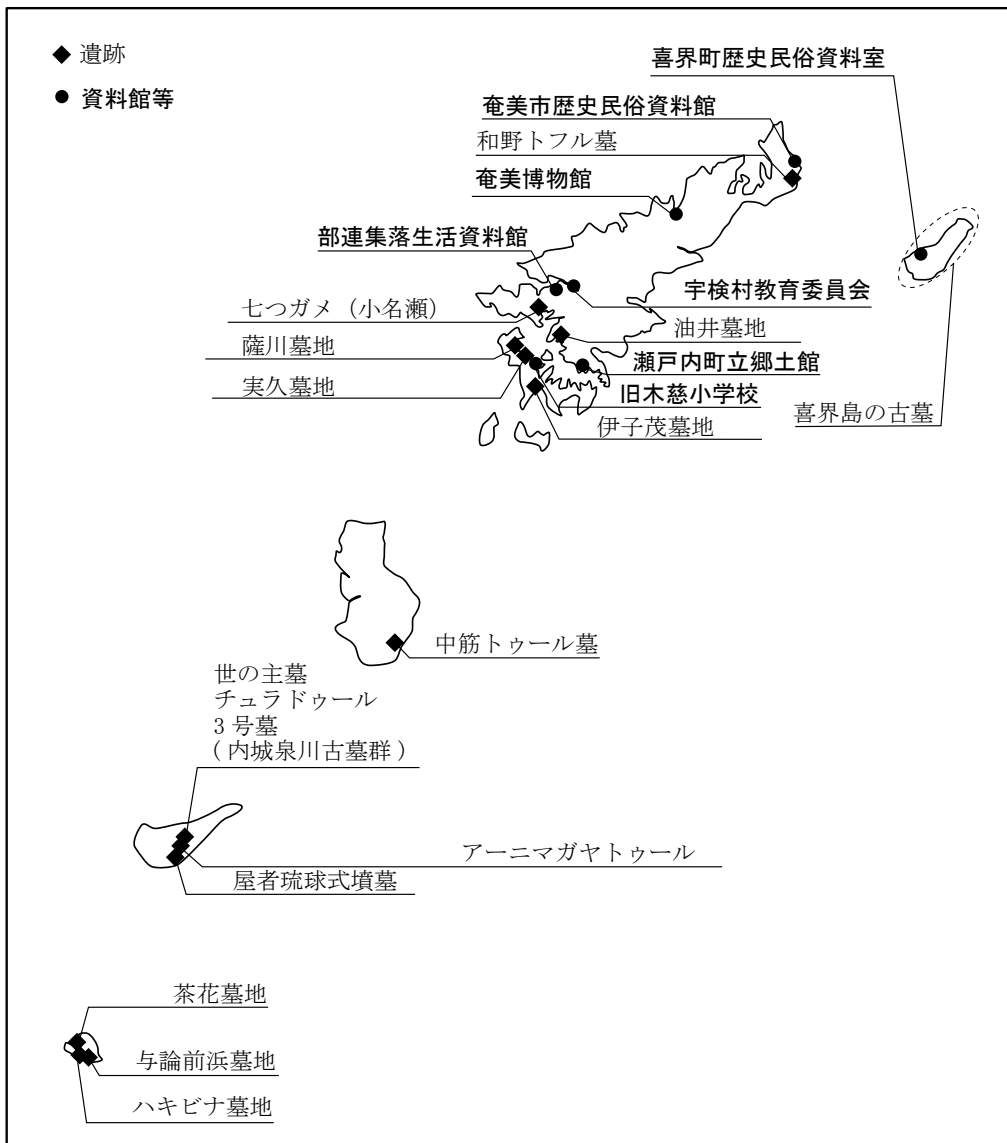


図1 奄美諸島の主要遺跡および資料館位置図

11基の内訳は、ボージャーが5基、マンガンが6基で、以下特徴的な資料を紹介する。〔2〕は、特徴的な器形ながら、口縁形態や文様等の特徴からボージャーに類する資料と目される。本資料は、線彫りによる銘書があり、隣り合う蔵骨器があって全ての文字を正確に判読できていないものの「……のろ」と判読できる。生産地で焼成前に銘を刻まれ、喜界島までやってきたと推測される。〔3〕はボージャーで、器形、口縁、屋門形態等からボージャーの中でも古式の資料と目され17世紀後半頃に比定される。〔4・5〕はマンガンⅢ式（もしくはⅡ式段階）でマンガンでもやや古式となり18世紀後半頃と想定される。〔6〕は全体を線彫りによる施文となる同Ⅵ式で近代に比定される。

(2)奄美大島(図2-7~13、図3-14~28、図4-29~39) 奄美大島では古墓踏査によってこれまでに赤焼御殿形厨子やマンガンが板石墓に伴う、あるいはこれに隣接して直接平地に設置する事例が報告されている(関根2022:464)。

古墓調査例としては和野トフル墓が挙げられる。本遺跡では12基の転用蔵骨器に遺骨が納骨されるが、専用蔵骨器である厨子は見られない。薩摩苗代川の甕が7基、琉球陶器壺が7基、1基は中国産壺で、おおよそ薩摩・琉球のものが半々となる(鹿児島県教育委員会1988)。

瀬戸内町小名瀬に七つ墓〔7〕と呼ばれる甕を埋設し口縁のみを地表に出す墓がある(関根2022:464)。12基の蔵骨器がみられ、このうち6基が厨子甕である。〔8〕はボージャーで計2基みられる、〔9・10〕はマンガンⅤ式で計3基確認される。もう1基マンガンで型式の判断がつかないものが1基確認される。ボージャーは18世紀前半、マンガンは近代と目される。

宇検村の油井墓地では、積石墓に伴い〔22〕の赤焼御殿形1基とマンガンⅤ式1基を確認することができた。前者は18世紀中頃、後者は近代と想定される。また、同村の平田墓地の洗骨改葬墓が宇検村教育委員会によって実施され、竹中正巳らにより報告されている(竹中ほか2019)。具体的には、2017・2018年度に積石墓の調査が実施され、A区画から4つの甕、B区画から1つの甕が確認されている。甕は薩摩焼と厨子甕と報告されている(大西2022)。

奄美市立奄美博物館では、23基の厨子を収蔵する。内訳は、〔11・12〕のボージャー2基、〔13〕の赤焼と蓋の無い赤焼の計2基、マンガンⅡ-Ⅲ式が3基でこのうち〔14〕は胴部主文様を掛け分ける特徴的な資料となる。〔15・16〕など同Ⅴ式が12基と最も多く、〔17〕などの同Ⅵ式は2基を数えた。また、マンガンでⅣからⅥ式と目され型式判断を保留した1基、同庇付1基を確認できた。ボージャーや赤焼が18世紀前半、マンガンⅡ・Ⅲ式は18世紀後半から19世紀前半、マンガンⅣ式は19世紀後半、同Ⅴ・Ⅵ式は近代に比定される。

奄美市歴史民俗資料館(旧笠利歴史民俗資料館)では、計15基の厨子を確認することができた。〔18・19〕は荒焼御殿形で計2基、マンガン庇付1基、〔20〕はマンガンⅡ式1基、同Ⅳ式1基、〔21〕などの同Ⅴ式が9基、18世紀に比定される荒焼やマンガンⅡ式もみら

れるが近代のものが主体となる。また、〔63〕の産地不詳の厨子甕1基を収蔵する。本資料については次項で図化紹介する。

宇検村教育委員会では、49基の厨子を収蔵している。改葬の際に収集されたものとされるが、その経緯等の詳細については不明である。倉庫には〔24〕の荒焼御殿形1基、〔25〕のマンガンⅢ式1基、同Ⅳ式1基、〔41〕などの同Ⅴ式計4基、マンガン庇付2基が保管されている。なお、〔27〕の産地不詳の厨子甕を確認することができた。庫外〔23〕には、〔28〕のようなマンガンが多数保管される。内訳はⅢ式が2基、Ⅳ式かⅤ式かその場では判別がつかなかったものが10基（ほとんどがⅤ式と目されるが判断を保留した）、Ⅵ式が1基、庇付1基を数えた。また、上焼御殿形（ソーベ）も1基確認できた。18世紀後半以降の資料がみられる。

部連集落生活資料館には、1997年にモヤを改葬された際に収集されたとされ、上焼御殿形3基、マンガン15基で同庇付の蓋1点が保管収蔵されている〔29〕。近世に一部遡る可能性もあるものの全体的に近代のもので構成されている。

瀬戸内町立図書館・郷土館（以下、瀬戸内郷土館）では18基の厨子を収蔵・展示する〔30〕。〔31〕の赤焼御殿形1基、〔32〕のマンガンⅢ式1基、〔33〕の同Ⅴ式が計5基、〔34〕の同Ⅵ式が計2基、〔35・36〕の同庇付が2基、〔37〕の上焼本御殿形が1基、〔38〕などの上焼御殿形（ソーベ）が計3基と上焼コバルト1基が確認できた。他に、〔39〕の産地不詳の厨子甕も収蔵する。赤焼は18世紀に遡るがこれを除くと19世紀以降の資料が主体となる。なお、瀬戸内町の資料は奄美大島内の収集資料だけでなく、次の加計呂麻島等の離島の古墓等収集の資料も含まれると推量される。

(3)加計呂麻島（図4-40～43、図5-44～50）伊子茂墓地では、〔40〕のボージャー破片1点と、〔41〕の埋設されたマンガンⅢ式1基を確認することができた。また、近接する現代墓地で、〔42〕のマンガンⅤ式1基が埋設されているのを確認できた。ボージャーとマンガンⅢ式は18世紀後半から19世紀前半に、マンガンⅤ式は近代のものと目される。実久墓地は、1980年代後半に平敷令治によって実施され作図された地図に厨子の所在が示されている（平敷1990）。2023年9月に筆者が実見した際、〔43〕のマンガンⅤ式1基が改葬されて天地逆で墓地内に取り置かれており、おおよそ調査時と変化ないのではないかと考えられた。また、〔44〕の赤焼御殿形1基が埋設利用されているのを確認することができた。これは18世紀後半の資料とみられる。

薩川墓地では、〔45・46〕の荒焼御殿形厨子が2つの現代墓地の、2家にそれぞれ1基確認されている。この2基は形態、貼り付け文などが酷似しており、おおよそ同時代に島に、19世紀前半にもたらされたのではないかと考えられた。

なお、旧木慈小学校は現在教育委員会が管理する収蔵庫として利用されている。ここにかんりの数の島内で収集された薩摩、琉球陶器の壺・甕類が保管されている。地元の方々によって収集されたものだが、この中にも厨子甕がある。内訳はマンガンⅤ式8基、同Ⅵ式

1基、同蓋1基が確認できた。〔47～50〕はいずれもマンガンV式で、これらの年代観は近代、一部戦後のものが含まれる。

(4)徳之島 (図5-51) 中筋トゥール墓は、いわゆる掘込墓で墓前面は石積によって閉塞する。納骨されていない風葬と、転用蔵骨器に納骨されたものがある。転用蔵骨器は中国産壺1基、タイ産壺2基、琉球陶器壺2基、薩摩苗代川甕8基、および石厨子1基が確認されている(伊仙町教育委員会2010)。本墓には、厨子甕は含まれていない。

徳之島における古墓調査等において厨子の報告例は管見の限り見当たらない。現代墓地の調査において、過去に平敷令治によって赤焼が伊仙町の松山墓地にあることを報告している(平敷1985:171)。筆者も、現代墓地で近代と考えられる陶製御殿形厨子(コバルト掛け)が置かれているものがあることを確認している〔51〕。

(5)沖永良部島 (図5-52・53) 和泊町では古墓調査が実施されており、その分布や概況が報告されている(和泊町教育委員会2019)。

世之主墓は県指定の文化財で、長軸約36m×短軸約29mの墓敷に二重の門と墓庭を有する石造墓で、屋根はいわゆる平葺の掘込墓である。墓室内には蔵骨器7基の厨子甕確認されており、いずれも琉球陶器で、内訳はボージャ―4基、マンガン庇付2基と報告されている〔52〕。ボージャ―と分類される本資料は特徴的な器形、屋門の無い透かし(窓)のみの製品で類例は壺屋焼物博物館収蔵資料(No.68・69)に類似資料がみられる(那覇市立壺屋焼物博物館2015)。

チュラドゥールは長軸約22m×短軸約12mの墓敷に、掘込式の墓室に二重の墓庭を有する石造墓で、屋根は入母屋造の規模の大きな古墓である。墓室内には蔵骨器83基が確認されており、琉球、薩摩、中国の陶器がみられ、琉球の厨子が最も多いとされる。個数の内訳は不明だが、赤焼御殿形、ボージャ―、マンガン、産地不詳の厨子甕が含まれている〔53〕。写真からの判断ながら、マンガンが主体となり、荒焼御殿形が加わるものと思われる。赤焼はやや古くなる可能性があるものの、全体として18世紀後半以降の資料が連綿と入っているように見える。なお、試掘調査が実施されており、出土品の中に荒焼の厨子甕蓋とするものが報告されている。

内城泉川古墓群3号墓は、いわゆる掘込墓で墓庭等の試掘調査が行われており、出土品の中に厨子甕マンガンの蓋が回収されている。また、墓室内の写真から薩摩苗代川の陶器甕を転用蔵骨器とするものが主となり、中国や僅かに厨子甕及び転用蔵骨器も含まれるようである。

知名町でも、和泊町の事業と併行し共同で古墓調査を実施、その分布や概況が報告されている(知名町教育委員会2019)。

屋者琉球式墳墓は、長軸約14m×短軸約11mの墓敷に切妻造を持つ破風墓で、墓室は石灰岩を掘込み正面は切石積みの石造墓である。墓室内は写真を見る限りは陶片があるよ

うであるが、納骨された蔵骨器は失われた状況となっている。トレンチ調査によって、ポージャー、マンガンV式が回収されている。

アーニマガヤトール墓は、斜面を掘込み長軸約13m×短軸11mの墓敷に平葺様の屋根を備える掘込墓である。特に正面墓口意匠は唐破風状彫刻され見事である。トレンチ調査によって、ポージャーの蓋が回収されている。

(6)与論島(図6-54~61) 筆者が参加した前浜墓地(52)の調査では、蔵骨器が埋設され、東西あわせて332基確認された。内訳はマンガン224基、青釉と仮称した鮮やかな青色、藍色の釉薬が施釉された厨子甕〔54〕が71基で、他にもいろいろな器が転用され蔵骨器として利用されている。マンガンの型式はIV式が1基で、他はV式となる〔55~58〕。ただし、安里編年V式は1900年代~1920年代となるが、V式の系譜にある現代までに製作されたもの〔53〕が含まれる(宮城印刷中a)。また、産地不詳の厨子甕〔59・60〕も6基確認されている。

与論島には、現時点では厨子の型式が判別できる詳細な報告は無いが、蔵骨器を埋設する現代墓地とは別に、洞穴や岩陰を利用した古墓があって、これらの古墓にも転用蔵骨器や厨子を実見することができた(関根印刷中)。与論島では砂浜の現代墓以前の墓制は、ギシあるいはジシと呼ばれる自然洞穴墓への風葬が一般的であった。洗骨再葬された人骨が納められた幾つかのギシを実見する機会があり、その中にはマンガンIV式からV式を確認することができた。相対的に現代墓よりも古いものであろうと目されるが、重複し連続しており、ギシにある厨子が現代墓地へ埋設されたものもあるのだろう。

3. 産地不詳の厨子甕(図6-62・63)

筆者が参加する奄美諸島の古墓調査の一環で、与論島の調査を実施した際に無釉の焼締陶器で沖縄の厨子甕とやや雰囲気異なる厨子甕を確認することができた^{註3}。当該資料は底部に穿孔がみられることから専用蔵骨器として製作された厨子甕であることは間違いない。これを、与論島の報告ではⅧ式として分類した(関根印刷中)。沖縄でかなりの数の厨子甕を見てきたが管見の限り類例がなく、混和材や沖縄の厨子に見られる器形的特徴の決まりからやや外れることから、産地は沖縄ではないと考えられた。与論島前浜墓地では6基確認し、前浜墓地以外の墓地をいくつか実見し、ハキビナ墓地、茶花墓地でも約30基(それぞれ20基、5基)確認することができた。なお、前浜墓地ではアンケート調査を実施しており、購入時期の回答としては与論町農協で昭和51年頃とされている(宮城印刷中b)。ただし回答は1件に留まっており、年代比定についてはもう少し別の視点からも考える必要がある。幸い瀬戸内郷土館収蔵資料は収集された記録があり、ご教示いただいた(町健次郎氏私信)。その結果、昭和47年に瀬戸内町伊須集落墓地で収集との記録がある。

この厨子甕と同種のもは、奄美市歴史民俗博物館、瀬戸内郷土館、宇検村教育委員会、



1 喜界町歴史民俗資料館



2 赤連喜界高校南側古墓群1号



3 坂嶺の古墓群5号



4 小野津クルミの古墓群5号



5 赤連喜界高校南側古墓群1号



6 坂嶺の古墓群2号



7 瀬戸内町小名瀬七つ墓



8 瀬戸内町小名瀬七つ墓



9 瀬戸内町小名瀬七つ墓



10 瀬戸内町小名瀬七つ墓



11 奄美市立奄美博物館



12 奄美市立奄美博物館



13 奄美市立奄美博物館

図2 喜界島・奄美大島の厨子



14 奄美市立奄美博物館



15 奄美市立奄美博物館



16 奄美市立奄美博物館



17 奄美市立奄美博物館



18 奄美市歴史民俗博物館



19 奄美市歴史民俗博物館



20 奄美市歴史民俗博物館



21 奄美市歴史民俗博物館



22 油井



23 宇検村教育委員会



24 宇検村教育委員会



25 宇検村教育委員会



26 宇検村教育委員会



27 宇検村教育委員会



28 宇検村教育委員会

図3 奄美大島の厨子



29 部連集落生活資料館



30 瀬戸内町立図書館・郷土館



31 瀬戸内町立図書館・郷土館



32 瀬戸内町郷土館



33 瀬戸内町郷土館



34 瀬戸内町郷土館



35 瀬戸内町郷土館



36 瀬戸内町郷土館



37 瀬戸内町郷土館



38 瀬戸内町郷土館



39 瀬戸内町郷土館



40 伊子茂墓地



41 伊子茂墓地



42 伊子茂墓地



43 実久墓地

図4 奄美大島・加計呂麻島の厨子



44 実久墓地



45 薩川墓地



46 薩川墓地



47 木慈小学校



48 木慈小学校



49 木慈小学校



50 木慈小学校



51 徳之島の現代墓地



52 世之主の墓



53 チュフトゥール

図5 加計呂麻島・徳之島・沖永良部島の厨子



54 前浜墓地



55 西前浜墓地(区画外)



56 西前浜墓地(区画36)



57 東前浜墓地(区画1)



58 西前浜墓地(区画27)



59 東前浜墓地(区画1)



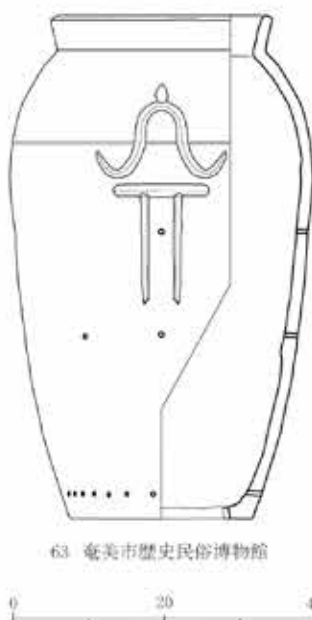
60 東前浜墓地(区画27)



61 東前浜墓地(区画5)



62 与論島前浜墓地地表採資料



63 奄美市歴史民俗博物館

0 20 40cm
(S-1/10)



図6 与論島の厨子・産地不詳の厨子甕

チュラドゥール墓でそれぞれみられる。これまで図示された例もないため、本項で奄美市歴史民俗博物館の身と与論島前浜採集の蓋を実測しこれを紹介する。〔63〕は奄美市歴史民俗博物館に収蔵される厨子甕の身である。器高は66.5cm、口径29cm、底径24cmで胴最大径は40cmとなる。これはマンガン掛け厨子のサイズとおおよそ同サイズとなる。口縁は一般にボージャーが玉縁、マンガン掛け厨子が断面バチ型であるのに対して、本資料は頸部で屈曲し肥厚せず短く外傾させる。胴部と底部付近外面、底部裏に約0.6cmの孔が穿たれる。釉薬が施されず素焼きの焼き締め陶器である。〔62〕は与論島の墓地で見られた蓋である。鍔縁最大径24cm、高さ10.5cm。沖縄の厨子甕蓋が一般に宝珠型となり、近代になりこれが崩れて饅頭型となるが、本資料は土鍋蓋の取っ手部分のような形状となる。素地に粗い石英粒を多く含む。マンガン釉のような黒褐色の釉薬が外面に施される。

4. 考察

奄美諸島における葬墓制と専用蔵骨器である琉球陶器の厨子は古くは、ボージャーや赤焼が流通することから、17世紀後半～18世紀前半から流通したことが窺える。この時期の掘込墓の蔵骨器のセット完形は、奄美大島のトフル墓や徳之島の中筋トゥール墓が参考になる。即ち、琉球陶器の壺、薩摩苗代川の甕および中国・タイ産の壺の転用蔵骨器と石厨子で構成される。今回の報告では、喜界島以外にもボージャーの収集例を紹介することができた。「薩摩藩が奄美と琉球の交流を制限した状況下で喜界島の人はどういうルートで沖縄産のボージャー厨子甕を入手できたのであろうか（関根2023:77）」という問いに用意する答えを今持ち得ていないが、線彫の銘書厨子〔2〕があることを考えると特別に注文し入手することができる程度の交流であったことが想定される。なお、本資料を確認した池治の古墓1号墓には、他に横目やノロが葬られている。

18世紀後半から19世紀中頃では、マンガンⅡ・Ⅲ式及び御殿形では荒焼が挙げられる。これも数は多くないものの、各島で見られた。この中で博物館等収蔵資料以外では、前出の池治の古墓1号墓や加計呂麻の現代墓が挙げられる。数が少ないため断定的なことは言えないが、やはり地域の中でも有力者やその家に受容されたものと推定される。

一方で、19世紀後半以降の厨子は、どの島でもその数を増やす。特に近代に入ると厨子は島々に数多くもたらされたことが窺える。

もう一つの課題である、産地不詳の厨子だが、現時点では確度の高い情報を持ち得ていない。形態的特徴から沖縄で生産されたマンガンの影響下に生産されたと考えられた。その中でも屋門の形態からV式の近代から現代の焼物に近いと推定する。近代から昭和50年頃までの奄美諸島で操業していた窯としては、以下がリストアップされる。

- ①津奈久焼（奄美大島大和村）明治頃
- ②野茶坊焼（奄美大島名瀬）昭和40年（1965）頃から 池淳一
- ③奄美焼（奄美大島名瀬）1960年代以前から 宮崎鐵太郎
- ④よろん焼（与論島）1970年5月～2000年 金子喜八郎

当該資料の生産地検索には、奄美の市町村行政をご担当する学芸員の方にお手伝いいただいた。先ず昭和50年代前後の購入との回答があることを考えると、①は否定されるだろうと考えられた。与論島における利用状況から考えても戦後と予想された。②野茶坊焼については、直接池氏の奥様に厨子甕の写真をみていただき「これは野茶坊焼ではないと断言できる」との所見をいただいた（町健次郎私信）。また、③奄美焼の宮崎鐵太郎作品は窯をみたことがある奄美郷土研究会会員の方の所見では、宮崎の作品はいずれも小型の製品で大型の製品は焼けなかったのではないかということであった（町健次郎私信）。残る④よろん焼については、よろん焼の金子喜八郎氏の息子である金子晴彦氏（石垣焼陶工）に写真を確認いただいた。よろん焼は天目釉の小型の製品であることから、おそらくよろん焼ではないだろうとご教示いただいた^{註4}。

以上、現在までに検索できたのは上記のとおりで、沖縄の厨子を模倣し、奄美で生産され、その受容に応えた厨子と想定したが、現時点では確定には至っていない。他に窯や別の陶工の作とも考えられるが、検索範囲を広げてみたい。いずれにしても、今回は資料紹介にとどまる。新たな情報を待ち、産地特定は今後の課題とさせていただきたい。

奄美諸島の陶磁器流通について渡辺芳郎は、北からの流れ、南からの流れ、島嶼域内での流れの三層構造で説明する（渡辺2021）。近世から近・現代にかけて、生産地が琉球にある厨子は南からもたらされたものである。本論が、どの時代、どのような階層に受容されたのかについて検討するきっかけとなり、南からの流れの基礎資料を提示できたと考ええる。一方現代の厨子が奄美を産地とすると、需要のある厨子を地元で生産しこれに応えたものとして、島嶼内での流通を示す資料となる。

5. おわりに

南島文化研究所の調査で2016年度に喜界島、2022・2023年度に奄美大島及び加計呂麻島で実施した厨子調査の成果に加え、関根達人の奄美の古墓調査の科研に参加しその中で得られた知見をもとに資料紹介させていただいた。執筆にあたり、現地の案内や情報提供など多くの方よりご教示いただきました。以下、氏名を記して謝意を表す。

麻生伸一、伊集院正、泉重行、上原静、鼎丈太郎、金子晴彦、川上晃生、河村貴志、北野堪重郎、喜友名正弥、金城翼、里朋樹、新里亮人、新里貴之、関根達人、竹中正巳、立神倫史、照屋真澄、土岐耕司、成田滋彦、新元真美子、野崎拓司、町健次郎、森達也、渡辺芳郎、渡聡子（敬称略、五十音順）。

なお、本研究は南島文化研究所の調査報告ではあるが、「奄美群島の葬墓制に関する考古学的研究」（基盤研究B、課題番号21H00589、研究代表：関根達人）及び「葬墓制資料に基づく近世琉球社会史の学際的研究」（基盤研究B、課題番号21H00604、研究代表：宮城弘樹）の成果の一部を含む。

《註釈》

- 註1 本論では、「蔵骨器」を専用・転用の蔵骨器を包括して指す。「厨子甕」は甕形、「厨子」と記載する場合は甕形及び御殿形の両者を含む専用蔵骨器として、用語を整理する。
- 註2 以下の科研調査を実施してきた。葬墓制からみた琉球史に関する基礎的研究（基盤研究C、課題番号18K00981、研究代表：宮城弘樹）。葬墓制資料に基づく近世琉球社会史の学際的研究（基盤研究B、課題番号21H00604、研究代表：宮城弘樹）
- 註3 実際には多くが施釉されていたと考えられる。低下度で焼成のため長年風雨にされされ釉薬が剥がれ落ちたと考えられるものや、沖永良部島のチュラドゥール墓資料は写真ながら、器形が類似する資料で釉薬に光沢があるものも認められる。
- 註4 2023年11月25日石垣焼のアトリエを訪ね、金子晴彦氏より、よろん焼の歴史や作品についてご教示いただいた。

《文献》

- 安里 進・ほか1997『伊祖の入れ御拝領墓の厨子甕と被葬者－近世墓の考古学的調査による家族復元－』浦添市教育委員会
- 伊仙町教育委員会2010『中筋川トゥール墓跡』伊仙町埋蔵文化財調査報告書14
- 大西智和2022『奄美大島 宇検村の歴史・文化の源流を探る－対外交流と葬送－』に参加して『鹿児島国際大学ミュージアム調査研究報告』19 鹿児島国際大学国際文化学部博物館実習施設・鹿児島国際大学ミュージアム pp.9-12
- 小野重朗1968「喜界島のモーヤとヤバヤ－奄美墓制点描」『南島研究』9 南島研究会 pp.2-7
- 鹿児島県教育委員会1988『下山田Ⅱ遺跡・和野トフル墓』鹿児島県埋蔵文化財調査報告45
- 国頭村教育委員会2019『村内遺跡詳細分布調査報告書（2）』国頭村文化財調査報告書第5集
- 関根達人2022「奄美群島の古墓の地域性と年代観」『梅檀林の考古学Ⅱ』大竹憲治先生古稀記念論文集 pp.457-466
- 関根達人（編）2023『喜界島の古墓』（令和3年度～7年度 科学研究費補助金奄美群島の葬墓制に関する考古学研究 研究成果報告書1）弘前大学人文社会学科
- 関根達人（編）印刷中『与論島の古墓』（令和3年度～7年度 科学研究費補助金奄美群島の葬墓制に関する考古学研究 研究成果報告書2）弘前大学人文社会学科
- 知名町教育委員会2019『知名町の古墓1』知名町埋蔵文化財調査報告書（14）
- 竹中正巳・渡聡子・鐘ヶ江賢二・大西智和2019「洗骨改葬人骨の甕への埋納－奄美大島宇検村平田墓地の事例から－」第124回日本解剖学会総会・全国学術集会講演プログラム・抄録集 第124回日本解剖学会総会・全国学術集会事務局 p.209
- 那覇市立壺屋焼物博物館2015『沖縄宗教藝術の精華 厨子－門上秀叡・千恵子コレクション収蔵記念報告書－』
- 平敷令治1985「上面縄の葬墓制」『徳之島調査報告書（3）－地域研究シリーズNo.8』南島文化研究所 pp.151-171
- 平敷令治1990「瀬戸内の葬墓制」『鹿児島県大島郡瀬戸内町調査報告書（5）－地域研究シリーズNo.14』沖縄国際大学南島文化研究所 pp.3-42
- 宮城弘樹（印刷中a）「厨子甕の研究（1）－近現代厨子甕の編年－」『総合学術研究紀要』第25巻第1号
- 宮城弘樹（印刷中b）「与論島の近現代墓－前浜墓地の調査－」『与論島の古墓』（令和3年度～7年度 科学研究費補助金奄美群島の葬墓制に関する考古学研究 研究成果報告書2）弘前大学人文社会学科
- 和泊町教育委員会2019『和泊町の古墓1』和泊町埋蔵文化財調査報告書（9）
- 渡辺芳郎2021「近世南西諸島における陶磁器流通の諸相」『第67回鹿大史学会大会』<https://researchmap.jp/watanabeyoshiro/presentations/32573966>（2023.11.5アクセス）